

明治村

だより

1998 Early Spring



初春号

Vol.10

平成十年一月一日発行(季刊)

明治村だより 第十号



目次

英国人画家 フランク・ペレスフォードと中条精一郎	山梨絵美子	2
新館長「あいさつ」	飯田喜四郎	7
日曜講座「明治建築種明かし」	西尾雅敏	8
明治のすゝろく		11
特別展「明治の正月と千支の寅」		13
冬の明治村		14
表紙写真清水志乃婦 明治村出初め式風景		

平成十年一月一日発行
 『明治村だより』第十号 (平成十年初春)
 発行 博物館明治村
 愛知県大山市大字内山一番地
 電話〇五六八 六七〇三三四 千四八四 〇〇〇〇
 東京事務所
 東京都千代田区紀尾井町三二二三
 文藝春秋ビル新館七階
 電話〇三三三二六三三 五五六六 千一〇二 〇〇九四
 製作 求龍堂

『明治村だより』

第十一号 (平成十年春 発行のお知らせ)

発行時期 平成十年三月(予定)

申込方法 『明治村だより』第十一号ご希望の旨

及びご住所・お名前を明記の上、送料
 一四〇円分の切手とともに封書にてお
 申し込み下さい。

◆英国人画家

フランク・ベレスフォードと

中條精一郎

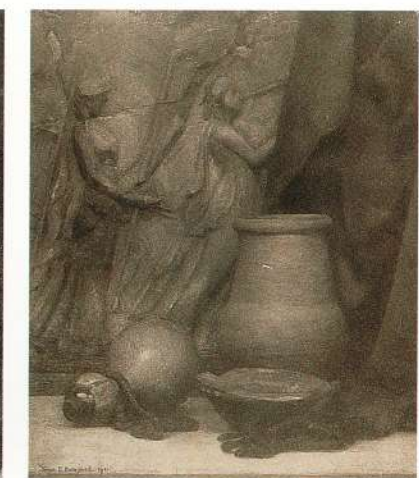
山梨絵美子
〔東京国立文化財研究所美術部〕



1

明治四十一年、第二回文展の「西洋画」の部にひとりの英国人画家の作品が出品されている。フランク・ベレスフォード作「中條君の肖像」(図1)「静物」(図2)である。周知のように文展は日本で初めての官立展覧会として明治四十年に文部省主催で開設され、初年から話題を集め、文展への入選が画家の地位を決定的なほどの権威ある展覧会となった。「中條君の肖像」はこの展覧会に入選しただけでなく、三等賞を受賞している。

作品の図版は、従来、しばしば紹介されてきたが、所在が不明であった。しかし、このたび、ロンドン郊外に住む遺族のもとに「インペリアル・エグジビション」に出品された作品として大切に保管されていることが確認された。また、日本滞在期の活動を知らせる若干の資料も遺族のもとに残されていることが明らかになった。それらをもとに、明治末に来日した一英国人画家の日本での足跡の一端を振り返るとともに、中條とベレスフォードとの交遊について記しておきたい。



2

近年、明治期に描かれた水彩画が注目されるようになり、その時期に来日して日本に影響を与えたと思われる欧米の画家たちにも興味を抱かれるようになってきた。水彩を得意とした画家三宅克己が、自らの回想録のなかで触れた英国人画家アルフレッド・イースト、ジョン・パーレーなどの名が、すでによく知られているが、彼らの日本滞在中の活動の詳細については、まだ明らかにされていない。ベレスフォードを例に、当時の来日英国人画家の活動のあらましが浮かび上がってくるように思われる。

ベレスフォードの名は、今日の日本近代美術史研究者の間ではほとんど知られていないので、画歴の概略を記しておこう。フランク・ベレスフォード (Frank Belsford) は、一八八一年英国中部のダービーに生まれ、幼少期を、ペルバーという村で多くの使用人を抱えて釘職人を営んでいた叔父のもとで過ごした。十一歳の時にハリソン夫人という人について絵画を学び始め、一八九五年から一九〇〇年まで地元



3



4

ダービー美術学校に在籍して、十八歳で絵画教師の資格を得ている。一九〇〇年、同校卒業後、ベレスフォードはロンドンに出てセント・ジョーンズ芸術学校に入学し、さらにロイヤル・アカデミーに学んだ。ここで、当時、日本から留学していた画学生たちと知り合い、日本への興味を深めることとなった。中條精一郎もこの頃にロイヤル・アカデミーに留学して建築を学んでおり、両者の親交もここで始まったと考

えられる。ベレスフォードの日本への興味はつづきの、ついに一九〇八年三月七日、神奈川丸に乗船し、日本へ向けて出航することとなった。旅の荷物の中にはアルフレッド・イーストの「ランドスケープ・ペインティング」(一九〇六年)やジョン・フィルモア著「ビブス・アット・メニー・ランド・ジャパン」(一九〇七年)など、近刊の日本紹介書が含まれており、それらを航海中に熟読して、日本の地に降り立つたと伝えられる。日本への到着は同年四月二十三日であった。そして、翌年五月二十二日に離日するまで約一年あまり、日本各地を旅行し、風景、肖像などを描き、少なくとも二度、展覧会を催している。

日本での初めての展覧会の様子を知らせる資料として、明治四十一年(一九〇八年)八月刊行の「方寸」第二巻六号に倉田白羊が寄せた「英人「ベレスフォード」君の自作展覧会を観る」という一文がある。倉田は「六月廿六日の午前「酷ひ吹き降り」の中を、人力車に乗って「八重洲町の五番地」にある「生命保険会社」の二階で開かれている展覧会に出かけたのである。会場に掛けられていたのは、「廿号位の婦人半身の油絵(図3・4)、ヴェラスケスの模写、中古の甲冑を着けたモデル写生中條某の日本服装の肖像日本婦人が御屋敷にきちんと座つたところの図それから前のナチュールなど、外に一番目立つた風景画があつた十二号位のものだ」といった作品であった。倉田は肖像画の

画技を認め、風景についてはあまり感心しない旨を身ぶりで伝えると、ペレスフォードは「自分も而う思ふと云つて快く笑つて呉れた」という。ペレスフォードは本国においても肖像画家として知られていた。続けて倉田はつぎのように記している。

「ペレ君はその内また一人の紳士を自分に紹介したそれは陳列されて居る肖像画の主人中條精一郎氏である、今度は同氏によつて種々な事柄を聴き得たそれはペレ君が母国に在つて同氏と相識り一種異なるカラーとアウトラインを有せる日本人を描いて見たいと云ふ淨欲から大分多くの日数を費やして中條君を座らせて描いた夫れを某展覧会に出品したところ非常なる喝采を博し得たそうだがそれは強がりに技術上の見解よりばかりでは無くて丁度日露戦争中の事だつたので日本人並びに日本に関する事とし云へばどんな詰まらん事物をも悦ぶと云ふ誠に無邪気な平凡な情味から割り出されたものださうである」。

ここには、文展に出品された中條精一郎肖像の制作背景と英国での評判、およびモデルとなつた中條のこの作品に対する感想が述べられていて興味深い。また、同図が同年秋の文展に出品されるに先だつて初夏に開かれたペレスフォード個展にすでに展示されていた事実をも明かにしている。

モデルとなつた中條精一郎は、日本近代建築史上に大きな功績を残した人物である。明治元

年米沢に生まれ、同三十一年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業して、同三十六年渡英。ケンブリッジ大学に学んで同四十一年に帰国した。翌年曾榑達蔵と共に曾榑中條建築事務所を創設し、慶応義塾大学の講堂、図書館等の設計、如水会館、華族会館、三井銀行大阪支店、明治屋ビルなどの設計を行つて居る。また、大正十年四月より同十三年三月までと昭和三年四月から翌年三月までの二期にわたり日本建築士会会長をつとめ、のち同会理事となつたほか、大正二年国民美術協会が創立されると同時に同会会頭となり、その後もたびたび会頭をつとめるなど、建築界、芸術界の重鎮として活躍した。その人柄は「何人でも初見参の折から、恰かも百年の友であるが如き態度を示された。之れ同君の極めて無邪気にして稚氣に富んだ性格の一面を物語るものである」と語られ

「素見の失敗」 大沢三之助「建築雑誌」昭和十一年五月、また、文学・美術にも造詣深く、趣味の人であつたとされる。一方、ペレスフォードは倉田白羊が「余程円満な性質と見えてこれ等の客々々にお辞儀をして歩く世間談をやる背中を軽く叩く握手をする、いや中々まめな人が仕舞いには日本の茶菓を出して饗応しながら片言かなんかで頻りに愛嬌を振りまいて居る」「方寸」二巻六号、前掲」と述べているように、人なつこい人物であつたらしい。こうした両者の友情、画家とモデルとの親しい交流が、「中條君の肖像」を、モデルの人格への理解と

だ。而して日本人の顔色は決して汚くないと曰つて居る。…兎に角本式に行つて居る。常識画だ。…人間がよく描けて居る。」(合評 石井柏亭、高村真夫、倉田白羊、山本鼎、小杉未醒、坂本繁二郎、森田恒友、莊野宗之助「方寸」明治四十一年十一月号)等、穩健な画風を支える確固たる画技を認める向きが強い。当時の日本の洋画界にとって、西洋の油彩技法の歴史の長

さ、アカデミスムの侮り難さを直視させられる機会となつたようである。

こうした展覧会への出品のほかに、ペレスフォードは岩崎小彌太の大磯の別荘に招待され、「大磯—日本庭園」などの油彩画の大作を描いている。また、横浜に写真館を営んでいた日下部金兵衛を訪ね、自らの作品を写真に撮影するよう依頼している。在日中であつた欧米人との

交遊も広く、建築家ジョサイア・コンドル、二八八一年に「ジャパン・メイル」を創刊し、その主筆となつたフランシス・プリンクリーなどの名も、ペレスフォードの日本滞在中の資料に見られる。岩崎小彌太は第一高等学校を経て東京帝国大学法科大学に在学中に英国ケンブリッジ大学に留学し、同三十三年に帰国した。中條と同時期に同じキャンパスに学んでおり、留



5

敬意を偲はせる佳作とする重要な要素となつたことは想像に難くない。

文展での「中條君の肖像」への批評は「普通の素人向きの肖像画で別には」と云ふところも無いが、すべてに相当な研究があつて、其れが渋滞のない色と筆とで描かれて居る(田中生、美術新報「明治四十一年十二月二十日号」)、「旨い。併し胴は形なしだ。…ペレスフォード君は東洋人の肉色が画き度くてならなかつた。そして中條君を座らせて初めて東洋人の顔を描いたの



6



7



8

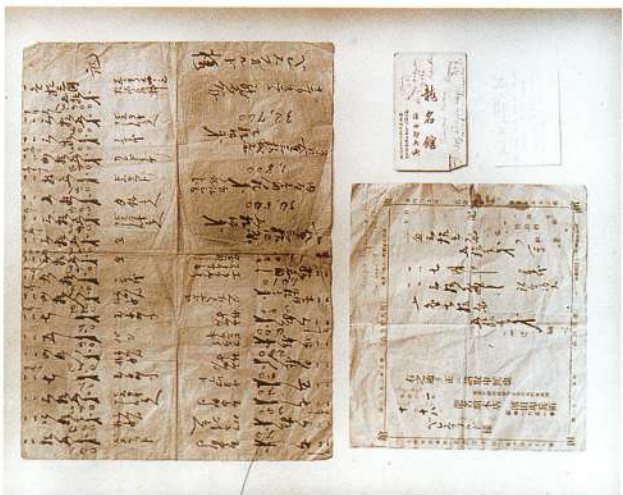
学中に交遊が芽生えていた。ベレスフォードを岩崎に紹介したのも中條であったようである。

また、遺族のもとに残されたベレスフォード撮影の写真から、京都、箱根などを訪れたことがわかる(図5、8)。東京神田の「龍名館」に投宿した折の請求書には「パン、フライ、チョコレート、ビステキ」などとあって、食事の様子もうかがえる(図9)。

ベレスフォードの離日を告げる記事は、同四十二年七月に刊行の「方寸」第三巻五号に見いだされる。先の一文と同じく倉田白羊によるもので、「満一年の月日を日本に送りその間極めてブーアなる日本の生活を探りて物質方面に随分と苦しみを重ねたる英国ベルバの青年画家ベレスフォード君は五月廿日を以て帰国の途に就き」(英人ベレスフォード「方寸」第三巻五号)とあり、離日に際して「横浜ゲーチーホール」において開いた展覧会について紹介している。出品作品には広尾、富士、金比羅、軽井沢、富士噴火口などを描いた風景画が多かった模様である。それらに対し、倉田は「混濁せる色彩と落ち着き無きブラッシュとは所詮彼が本国より齎らし来たる製作に比して其差等果して如何なる可きぞや」という感想を抱いた。「初め中條氏を通してベ氏のポルトレー専門画家なりとのことを知りその第一会に置ける諸作を通覧して直ちに首肯を得たりアカデミックの形式に囚はれし如きその作風は稍青年の横溢せる活気存在を疑はしめざるにも

非ざれど彼と同年輩なる我同胞間にその無活気なる所謂月並み技工をすら容易くは求め得られぬのを思へば一面亦推称するに躊躇せざるものあり」と評価した倉田にとって、甚だ意外であったらしい。この記述は、幕末から約半世紀を経た明治末には、油彩画の本場ヨーロッパから来日した画家の作品に対して、ほとんど対等の目で批評するほど日本の洋画界が成長していたことを物語っている。

このたびの調査は、ベレスフォードの日本滞



9

新館長「あいらじ」

飯田喜四郎



村松貞次郎前館長の跡を受けて平成九年十二月二日付けで博物館明治村館長の重責をお引き受けすることになった飯田喜四郎(いいたきしろう)です。

私は昭和三十八年に名古屋大学に赴任しましたが、すでにその前年に財団法人明治村は設立されており、三年後の開村を目指して谷口先生を中心として文化財建造物の修復・保存に深い造詣をもつ専門家で構成された建築委員会のもとで、展示する建造物の解体・移築工事が急ピッチで進められていました。赴任後間もなく谷口先生の御依頼

をうけ、急速に消滅しつつあった近代建築の移築による保存という画期的な大事業のお手伝いを始めました。最初に取り組んだのはすでに京都での調査を終り、解体材が運搬されていた聖ヨハネ教会堂の再建でした。

この工事が私に割当てられたのは多分、私がパリで主として教会堂の修復工事を扱っていたことを知っておられた恩師・関野克先生の御配慮によると思われる。私にはこれが日本で手掛けた最初の修復工事でした。爾来建築委員として山田郵便局やザビエル聖堂や呉服座などの移築に関与して参りましたが、谷口・関野両館長の指導の下で仕事を進め、村松館長の諮問にお答えしてはいても、館長の立場で考えることはなかったもので、館長の重責を思うと不勉強であったことが今更のよう

に悔やまれてなりません。明治村の創設者の一人である谷口先生は十四年にわたって館長を務め、五十件近い建造物を移築整備されて明治村の今日の姿をほぼ造り上げました。第二代関野館長は十二年余の在任中に十数件の移築されると共に博物館として学芸部門の強化につとめ、あわせて文化財としての展示建造物の

在中の活動と人的交流に絞って行なった。今後、彼のイギリスにおける日本人留学生との交流についても調査が及び、英国に留学した日本人画家たちの活動がさらに詳しく明らかにされることが期待される。

詳しい経歴書ともいべき移築工事報告書の刊行等の事業に尽力されました。

第三代村松館長は開村以来すでに四半世紀をへて損傷が著しくなった東山梨郡役所や呉服座などの修理復原と同時に、移築建物を会場とする展覧会の充実と、とくに洋館に家具調度を常設してその生きた姿を再現し、それを体験できるように改めました。家具類のない洋館はいわば中身のない殻なので、内部空間を鑑賞できるようにするこの措置は、早くから望まれていました。文化財建造物を良好に保存するには適切で積極的な活用が前提です。草創期から保守期に重心が移った博物館にとって村松館長がとった方向は時宜をえたものでした。それが緒につき、これから独自色を打出そうとしていた時に急逝されたことは全く残念としか申しようがありません。

わずか六年余しか在任されなかった村松先生の跡を受けた私は、当然前館長の方向をうけつぎ、関係する方々の御協力を仰いで、複製ではない本物の建造物を展示する博物館として内容の充実と発展に努める所存でありますので、どうぞよろしくお願い致します。

「明治建築種あかし」

西尾雅敏 [博物館明治村・建造物担当部長]

「明治建築種あかし」と題して、日曜講座をはじめてから一年程になります。日々明治村を訪れる多くの人たちの年齢が少しづつ若くなつて、明治建築と言わず、かつての自然流生活感覚、建築常識に疎くなってきたようで、折角見学して頂いても、余りその特徴を知らずに帰って行かれるのは、博物館として悲しく、毎月二回題材を決めてお話することにしました。大々的な宣伝をしておりませんので、偶然来村された人たちを相手に三十分程の気軽な話を続けてきました。この一年の主な話をこの紙上に再録してみましよう。

毎年四月、村内の第四高等学校武道場「無声堂」で剣道大会が開かれていますので、四月には「道場」に因んだ話をしました。

武道道場で重要な要素は「音」だと思われれます。武道は技の修練を通して心を磨くものとされていますが、静かすぎても宜しくないし、もちろん喧しくてもいけない。静かな音楽を聴いていると落ち着いて、場合によっては眠くなるのと同じで、試合中、気分が落ち着いてしまつていては、速い動きはできません。俊敏な動きをするためには血を騒がさせてお

刀と防具が当る音、防具と防具が当る音、竹刀が空を切る音、それぞれに違う音が武道道場の中でどのように効果ある音になるのか、そのメカニズムを見てみましょう。

・武道道場の音響メカニズム

音が効果的に伝わるためには、音源と共鳴箱と反響する環境が適切でなければなりません。この道場建物を分解した場合、音源は床板、共鳴箱は床下、反響する範囲は床板から天井板までとなります。床板で出た音が、床下の空間で増幅され（ギター）の箱の役目）天井に当るのですが、天井板が床板と同じ様な性質（漆喰や鉄などの固い材料ではなく、柔らかい）の材料なので単純に反射するのではなく共振して送り返す、といった反射をするようです。硬い壁にボールぶつけをするより、相手からボールを投げかえしてもらう感じなのです。さらには天井の高さが高いので、微妙に柔らかくそして長い反響となる。もしこれが漆喰天井だと、キンキンと固い感じの反響となります。

この道場にはもう一つ大切な工夫がされています。床下の中央付近に六十センチメートルほどの溝があつて、周辺の深さの倍ぐらいになっているので、少し低く重い音に強く共鳴します。その音は人が聞きやすい振動数に近く、より迫力を生むようです。太鼓でも小さな物では高い音、大きな太鼓だと低く強い音が出るのと同じ。一般家庭でも床下の深さは室内の音に影響するはずですし、明治村の中でも三重県庁舎、北里研究所、内閣文庫などは床下が深いので、靴音も低めの重い音がします。でも、建物によって響きに差が出ます。県庁舎は廊下も部屋も余り響かない、天井に目透かし板や紙が使つてあつて音が逃げるからで、一方、文庫等はレンガ造りでおお且つ硬い漆喰天井ですから、高く良く響きます。建物にまつわる音をもう少し見てみましょう。



無声堂
天井が高いため、音の響きが長い



ザビエル天主堂内部
高い天井が音をゆっくりと返してくる



北里研究所車寄せ

かねばならない。緊張感を維持し、集中力を高め、反射神経を鋭くすることによって、技術も上達するでしょうし、怪我也も少なく済みます。

現代的なスポーツであれば、笛や太鼓で盛んに応援しますし、室内でも「がんばれ」とか、「よし」とか声を掛けます。しかし、古武道では余り声を発しません。はしたないから。とすると、静かすぎるのを避けるためには動きによる音ということになります。張り詰めた精神状態であれば、ごく小さな音でも聞き逃すことはないでしょうが、それでも武道であれば、腹に響くような迫力の音が相応しい。そんなに高い音ではなく、力強い音で、ある程度響きが長い方がよい。足で床を踏み込んだ音、竹刀の音、そして打ち込みに合わせて発する「面」とか「胴」とか言う声が主な音源になります。その音が試合をしている者、練習中の者などの気分を盛り立てることになります。音の長さも問題です。竹刀が体に当たっている瞬間は非常に短い。その短い時間しか音が響かなかつたら、太刀の効果は周りの人に分かり難い。イントロクイズと同じです。打ち込んだ太刀の余韻を残すためには、ある程度響き続けて欲しいのです。

踏み込んだ時に足で床を叩く音、竹刀と竹刀が当る音、竹

・北里研究所の車寄せは鳴龍みたいに響く。

この車寄せの天井には、西洋流に見ると少々下手な天井蛇腹が作られています。全体として湾曲した天井のようになっているため、中央で手を叩くと日光の鳴龍のようにピンと反響します。天井が漆喰塗り、床がモルタルであつて、お互いに硬い材料なので音が吸収されないせいもあるようです。

・聖ザビエル天主堂の荘厳さの秘密は音にもある。

この教会の天井はポールの湾曲した天井で、音が外へ逃げにくい。また、壁が煉瓦躯体に漆喰を塗つてあつて反射が強いので残響が大変に長くなります。それでも天井が木製であるせいで、反響の音は柔らかい。この二つの条件のお陰で、神父さまの声が神の声にも似て聞こえます。残響が長いということは、一つ一つの言葉をゆっくりと丁寧に話す必要があつて、一言一言論すように話す説教には向いているのかもしれません。

音響効果というと現代では、とかく機械的に処理しようとしていますが、機械を使わずともうまくゆくものです。人間の耳は機械より厳密に音を把握しますし、一方で具合良く選択もしますから。

暑い八月には「明治建築で過ごす夏」という話題でお話をしました。現代の住宅に比べて大変に天井が高い明治の建物、そこで過ごす夏はどんなものか。という話で、この話は好評でした。

暑い空気は上に昇り、冷たい空気は下方へ下がるのは、誰でも知っています。夏、人の居る部屋の温度は上がります。熱くなった空気が天井近くに集まつて、そのままでは部屋の温度がどんどん上がるのですが、その時、その熱い空気が窓か

ら外へ逃げれば、そして、代わりに外の涼しい空気が下の方から入ってくれば、機械冷房は必要無い。こんな風にうまく具合に内外の空気が出入りするためには、条件があります。窓の上下の長さが長くて、上の方と下の方で別々に開けられること。そのためには、日本家屋に多い左右引き違いの建具ではなく、西洋風の上と下に別々の小さな窓があると、空気の流れは良いようで、これが匂いぬきにもなっていました。建物の条件としてはこのような窓があればよいのですが、もう一つ大切な環境条件があります。外の空気の方が部屋の中より涼しいのが条件です。これが現代ではかなわなくなっている。

近年の住宅環境では隣家との間が狭く、コンクリートなどで舗装されたりして、太陽熱を十分に蓄熱してしまっています。昔は、建物の間が広がったし、樹木などが植わっていて、幾重にも重なった葉が太陽熱を別のエネルギーに振り替えていたため、空気が涼しかった。ですから、暑い夏の過ごし方は、窓を開け放して、よしずを差し掛けておけば良かったのです。

九月一日は、大正十二年の同日関東大震災が発生したことによって「防災の日」となっています。そして、丁度その日、帝国ホテルが完成した日でもありました。そこで、九月のテーマは「帝国ホテルと地震」と題して、帝国ホテルが震災の被害を受けなかった理由などを話しました。

その日、日比谷の帝国ホテルは新館完成竣工式を昼過ぎに控えて忙しい時でした。激しいゆれの後、多くの大建築が壊れ、更に焼け落ちていきました。下町では戦場のような惨状



帝国ホテル
ゆるやかな山のようなかたちは崩れにくい形でもある



学習院玄関付近
洋館の窓には、上げ下げ窓と換気用回転窓、玄関横和室には引き違い窓

が何日も続いたと言います。そんな中、帝国ホテルはさほどの被害もなく、被災者の救援基地になったと言います。

なぜ、帝国ホテルだけが壊れなかったのか。考えられる理由は二つあるようです。一つ目の理由。日比谷は昔、海でした。固い地盤ではありませんから、帝国ホテルを設計したフランク・ロイド・ライトは一つのアイデアを実行しました。短い松の杭をびっしりと立て、その上に広い建物を載せる方法を採用したのです。海の上に浮かぶ大きな船のような姿です。地面が揺れても上にある重い物は揺れなかったのです。地下水位が高かったお陰で松杭が腐ることもありません。

二番目の理由。その日竣工式だったので、建物は出来立てのほやほや、コンクリートなどは未だ若い柔らかさを秘めていた、と考えられます。私たちの日常の触覚の範囲では固いものに違いありませんが、コンクリートも時とともに固くもろくなってゆくものです。最初は羊羹を連想させます。しなやかな建物ですから、崩れ難い。子どもの体が柔らかく怪我をしにくい、ということと似ています。松杭の考え方は現代の免震構造に生まれ変わり、若く柔らかかった話は超高层建筑での柔構造（柳の木）の理論にも通じます。難しい理論と言えども、その本質は結構やさしい話なのです。

日曜講座では他にも季節に合ったお話をしてきました。明治建築の中に工夫されている使い方やそのための技術が、これからの住まいの作り方に少しでも役立てば幸いです。今後も出来るだけ続けようと考えています。第四高等学校物理化学教室で毎月第二、第四日曜日の午前中です。但し、二月までは寒いので休講です。では、ご来聴をお待ちしております。

明治のすざろく

正月の子供の遊びにつきものすざろくですが、テレビゲームなどがやりの昨今、現代っ子にはもはやなじみが薄いかもしれません。

すざろくは元々盤双六といって、将棋盤のような台の上でサイコロを振って石を進める遊戯でした。これはインドにその発生の起源をもち、中国を経て仏教伝来とともに我が国にもたらされました。奈良時代には庶民にまで流行し、賭事の一つとなったため再三禁止令が出たということです。その後江戸時代の厳しい取り締まりにより、すざろくはおもに子女の遊びとなって上流社会にわずかに遺る程度になりました。

盤双六から発生したのが一枚の紙上で遊ぶ盤双六で、現在のすざろくにあたります。遊び方は基本的に盤双六と同様で、さいころを振ってコマ（絵）を進むわけですが、一つずつ順番に進む方法とサイコロの目だけ進んだり戻ったりするいわゆる飛びすざろくがあります。今はこの飛びすざろくの

方が一般的です。

江戸時代寛永年間に普及した絵双六の始まりは仏法すざろく・浄土すざろくとよばれるもので、仏教の教理を絵によってわかりやすく教えることを目的として作られました。当初は墨刷り一色だけの地味なものでしたが、浮世絵の流行に伴い極彩色の錦絵すざろくが誕生しました。

すざろくの題材は、その時々々の流行を取り入れ、庶民の旅へのあこがれを凝縮した道中双六・名所双六、歌舞伎に対する人気を反映した芝居双六・役者双六・八犬伝双六・吉原双六などさまざまなものが作られました。まさに江戸文化を象徴している観があります。

しかしさらに多種多様なすざろくが誕生して黄金期を迎えるのはやはり明治時代です。

明治のすざろくは、従来のものに加え、新しい時代の世相をそのまま写しだす文明開化の風物を題材とした郵便電信双六・鉄道双

六・自転車双六・戦争双六などが数多く作られました。

明治も後半になると、婦人・子供向けの雑誌が次々と創刊され、その正月号の付録としてすざろくがかかさずつけられるようになりました。この事が何といてもすざろくが大流行した一つの要因であると考えられます。

振り出したサイコロの目に一喜一憂し、さまざまな場面に遭遇しながら徐々に「上がり」へと登り詰めて行く――まさに人生ゲームのようなすざろくには単なる子供の玩具とはいえない面白さがあります。それは日本人の精神構造や生活観そのものを投影しているような感じさえあります。明治時代の文化を楽しむながら学べる資料として見ると、すざろくはなかなか有意義な遊びであると思われれます。

以下館蔵のすざろくから二、三ご紹介したいと思います。



図1 男女一代出世壽語録 明治十九年
〔春曉画・木版刷〕

このすころくは男女それぞれの一生をたどってゆくもので、当時の人生観がはっきりあらわれています。子供時代を振り出しに学校・奉公・月給取り・職人・養子などのコマがあり、「上がり」は楽隠居となつていきます。しかしサイコロの目によって不幸・逃亡などに当たると、一生浮かばれない人生を送るといふ悲惨な結末も待つています。長い人生どこに意外な落とし穴があるかわからないという教訓めいたすころくです。

*特別展「明治の正月と千支の寅」に出品



図2 日本歴史双六 明治二十四年
〔武内桂舟画・石版刷〕

古代史から明治二十二年の憲法制定までの日本歴史上有名な事件をあげて、遊びながら歴史の勉強が出来るという仕組みのすころくです。すころくは子供の為のものという観点からか、ただ遊ぶだけでなく学ばせるといふ大人の意向が如実にあらわれています。



図3 女学校すころく 明治四十二年
〔少女世界』付録・石版刷〕

女学校入学からめでたく卒業するまでの学校生活をあらわしています。明治三十年代を過ぎると女性のための教育が普及し始め、各地に女学校が設立されました。しかし女学校へ上がれるのはまだほんのひとりにぎりの女性だけでしたので、あこがれの気持ちから少女向けのすころくとしてこのような題材のものが作られたと思われまます。『少女世界』は明治三十九年、博文館より発行された雑誌です。錦木清方の手になる口絵で飾られ、詩歌、服装、手芸、礼儀作法などの記事がおもで、明治の良妻賢母志向に基づいた編集でした。当時、女性の生き方はかくあるべしといった風潮がよみとれると思います。

特別展

明治の正月と千支の寅

会期——平成9年12月20日(土)〜平成10年2月1日(日)
会場——三重県庁舎特別展示室

明治の正月風景をあらわす錦絵ほか約30点及とらの郷土玩具約60点を展示。

明治の正月風景をあらわすものとして、正月特有の飾り付けや子供の遊びなどがよく描かれています。子供の遊びという点、男の子は竹馬・コマ廻し・凧あげ、女の子は追い羽根つきと大体決まっています。羽根つき遊びは古くは神事に伴うものであったとされますが、江戸時代文化文政期以後より流行したもので、それまでの素朴な木の板から押し絵や彩色の美しい羽子板を用いるようになりました。元来正月風俗は地域によって様々な違いがあり、その土地の生活習慣に基づいた伝承が受け継がれてきました。近頃は都市部も地方もおしなべて画一的になり、日本古来の風俗が失われつつあるようです。今回展示する描かれた明治の正月風景を通して往時の伝統的な人々の暮らしを再認識していただければ幸いです。



神農の虎 (大阪府)

また千支にちなんで、とらの郷土玩具を併せて展示します。虎は我が国には生息してはいませんが、古来より中国からもたらされたさまざまな知識や思想



子供の遊び 永濯画



信貴山の福虎 (奈良県)

に基づき戦勝を象徴する獣神として尊ばれ、毘沙門天信仰と結びついて広く親しまれてきました。動物園で実際に虎を見る事が出来るようになったのは明治十九年のことで、当時来日中のイタリア曲馬団が、生まれた虎の仔を上野動物園のヒグマと交換したことによりです。

とらの郷土玩具のなかでも圧倒的に多いのが張り子細工で、東北地方から沖縄まで殆ど全国でみられるものです。各地方でそれぞれ特色があつて表情なども異なり、特に那覇の郷土玩具は原色を施した中国風のもので、虎退治で有名な加藤清正などの説話にちなんだものもあり、子供の健やかな成長を願って節句飾りに用いられます。明治村では正月催事のひとつとして、元旦から一月四日までの期間、張り子のとらの絵付けをすることが出来ます。この機会にぜひ個性的な張り子のとら作り挑戦してみてください。

冬の日だまり 明治村

12月1日(月)～2月1日(日)

野山を駆け回るガキ大将
バルコニーで紅茶を飲む貴婦人
書齋で本を読みふけるお父さん
縁側でまどろむ猫とおばあちゃん
明治村には、そんな日だまりの
情景がいっぱいあります
暖かい冬の日、のんびり、
ゆったりお過ごし下さい

■野山遊びで暖まる

[第四高等学校武術道場「無声堂」前芝生広場横]
2月1日(日)まで
木の枝ブランコ、落葉スキー、ターザンごっこなど、懐かしい野山遊びをお楽しみください。
また、期間中の日・祝日・正月三日には、たき火で「焼きいも」をつくります。

●新春の伝統芸

[呉服座]
1月2日(金)・3日(土)
初神楽
熱田神楽保存会 13:00～ 14:00～
子供たちによる神楽太鼓と巫女の装束を身にまとった女性による古式ゆかしい舞を披露します。
1月4日(日)
三河万歳 三河万歳保存会 13:00～
受け継がれるおめでたい万歳をお楽しみ下さい。

●各地郷土の雑煮屋

1月1日(祝)～4日(日) [京城中井酒造]
京都・高山・札幌の郷土色豊かな雑煮がならびます。(有料)

●正月遊びめぐり

1月1日(祝)～4日(日)
10日(土)・11日(日)・15日(祝)
コマ回し・福笑い・ケン玉・カルタとり・羽根つき・ヨーヨー [清水医院横路地裏広場]
竹馬・凧あげ
[第四高等学校武術道場「無声堂」前芝生広場]

●書き初め

1月2日(金) [森鷗外・夏目漱石住宅]

●新年宝さがし大会

1月1日(祝)～4日(日)
10日(土)・11日(日)・15日(祝)
建物に隠された「宝」を探しながら村内をめぐり、ゴールで記念品プレゼント。(有料)

◆1998 明治村カレンダー発売中

毎年開催されている写真コンテストの入賞作品を綴ったカレンダーです。四季折々の明治村の表情と美しい自然をお楽しみください。

- ◇価格 1,000 円 (壁掛 12 枚タイプ・B3 変形版)
- ◇ご希望の方は代金に送料 (1 部の場合 390 円) を添えて現金書留にて
〒484 愛知県犬山市内山1
「博物館明治村カレンダー係」までお申し込み下さい。
- ◇1月31日まで発売

明治村のお正月

●和服の女性の方は入場無料

1月1日(祝)～15日(祝)

●「寅」「虎」のつく姓名の方は入場無料

1月1日(祝)～15日(祝)
証明となるものが必要です。

●お正月装飾

1月1日(祝)～15日(祝)
レンガ通りの建物をはじめ日本家屋を中心に郷土の正月を再現します。しめ飾りや門松、正月料理などを建物の地方にあわせ、装飾展示します。



●屠蘇・大福茶サービス

1月1日(祝) [正門前]
各先着200名

●鏡割り

1月1日(祝) 12:00～
[札幌電話交換局横]
鏡割りのあと、樽酒をお召しあがりください。

●餅つき

1月2日(金)・3日(土) 12:00～ [呉服座前]

●張り子の「とら」を作ろう

1月1日(祝)～4日(日) [聖ヨハネ教会堂]
張り子の色付けを体験。(有料)